（資料）

第 20 回舟橋聖一文学賞

第 38 回舟橋聖一顕彰青年文学賞

第２０回舟橋聖一文学賞
授賞者

作品名	けんぐゎい	出版社名	光文社
著者	朝倉（あさくら） かすみ		

第３８回舟橋聖一顕彰青年文学賞
授賞者

優秀作品

作品名	解く人（とひと）へ	作品部門	小説
作者	古井（ふるい） 菜月（なつき）（筆名：紫草（しぐさ） ひと）	年齢	30歳
住所	京都府京都市		

第２０回舟橋聖一文学賞

受賞作品

作品名　『けんぐぁい』
著　者　朝倉　かすみ

受賞コメント

　このたびは、舟橋聖一文学賞を頂戴いたしまして、ありがとうございます。
　彼の名を冠した賞を賜りましたこと、まことに光栄で、ぴかぴか輝く星のように美しいなにかを呑み込んだようなきもちです。
　その星のように美しいなにかは、わたしのお腹のなかでもぴかぴか輝き、わたし自身を内側から照らしてくれます。
　明るいあたたかさがゆっくり広がり、わたしのからだのすみずみまでいきわたり、ありがたさとか、希望とか、やるぞって意欲とかが、指先にとぼるようです。
　初めて書いた時代小説でした。
　書いているあいだずっと、手弄りのノロノロ歩きでした。
　毎回励ましてくれた担当編集者氏を始め、『けんぐぁい』という小説に関わったり、応援してくれたりした、すべての方々に感謝します。
　彦根には、一度、行ったことがあります。
　17 歳のとき、わたしは修学旅行の選択コースで「彦根城コース」を選んだのでした。
　それからおよそ 50 年。
　ふたたび、彦根を訪れる機会がめぐってきました。
　呼んでくださった彦根のみなさま、ありがとうございます。
　とても嬉しい。

著者プロフィール

　朝倉　かすみ
　1960年北海道小樽市生まれ。2003年「コマドリさんのこと」で第37回北海道新聞文学賞を、2004年「肝、焼ける」で第72回小説現代新人賞を受賞し、作家デビュー。
　2009年『田村はまだか』で第30回吉川英治文学新人賞を受賞。2019年『平場の月』で第32回山本周五郎賞受賞、161回直木賞候補に。映画化もされ話題となる。2024年『よむよむかたる』が第172回直木賞候補に。2026年『けんぐぁい』で第175回直木三十五賞受賞。『ほかに誰がいる』は、アニメーション化され、『エリ』というタイトルでカンヌ国際映画祭に選出、オタワ国際アニメーション映画祭にて最優秀短編賞を受賞。ほかに『満潮』『ぼくは朝日』『にぎやかな落日』『棺桶も花もいらない』『メルヘン』など。

『けんぐゎい』あらすじ

時は文化文政、江戸は本所三笠町の貧しい長屋で育った姉と妹。利発だが六つの歳に疱瘡を患い、全身に酷い痘痕が残り、結婚や子育てという女の道をはなから諦めていた姉ふゆ。縹緻よしだが、感情が昂ると興奮して手がつけられない逆上せ癖のある妹りよ。二人は幼くして父を亡くし、ふゆは手習師匠の手伝いに、りよは船宿の下女奉公に出された。賢さを見込まれ自身も子供たちに読み書き算盤を教えるようになったふゆは、師匠の養子で、残酷な人格と禍々しいほどに歪んだ性癖をもつ宗三郎から手籠めにされ懐妊するが、現人神と崇められる女産医と出逢い、彼女の継承者としてその医術を習得する。世間から虐げられ、性をぞんざいに扱われ、尊厳を奪われ生きてきた女たち。ふゆは、社会の「圏外」にはじき出された者たちが集う、ガストホイス（医療所）をつくり、皆の拠り所となっていく。重い鎖を断ち切った女たちの強かな生命力あふれる、時代小説の新しい扉。

『けんぐゎい』　［ 選評 ］　　選考委員　　富岡　幸一郎

「その娘の名は、ふゆという」という一行から始まる小説は、尋常ならざる、異形のいのちの力を秘めた女性の生涯を描いていくが、その力は、驚くべき文体の力によって囲繞されている。作中で「おまえは、一生、外側にいるしかないんだ」という、「け、ん、ぐゎ、い」の呪文が降りてくるが、いのちの力は、身分や世間の内と外の柵を乗りこえて、ひろびろとした自由の空間へと読者を誘ってくれるだろう。一読者として、このように魅惑的な文字通り力強い小説と出会えたことを心から感謝したい。

第３８回舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品

作品名　小説　『解く人へ』
作　者　古井　菜月（筆名：紫草　ひと）

受賞コメント

　このたびは、舟橋聖一顕彰青年文学賞の優秀作品に選んでいただき、誠にありがとうございます。

　「解く人へ」は、父の死をきっかけに故郷へ戻った娘が、父の遺した手仕事と向き合う物語です。彦根仏壇には、部材を解き、洗い、組み直す「洗濯」という営みがあります。私はその仕組みに、何かを受け継ぐことは、必ずしも元の形を守り続けることではない、という希望を見いだしました。言葉を多く交わさなかった父と娘も、手を動かすことで、もう一度向き合えるのではないか。そう考えながら書きました。

　私はひこにゃんが好きで、彦根には以前から親しみを感じていました。彦根城や七曲がりの町並み、琵琶湖、井伊直弼ゆかりの埋木舎。物語の舞台を考えるうち、彦根には、時代が変わっても形を変えながら受け継がれてきたものが幾つもあると感じました。父の宮殿と彦根城を重ねたのも、そのためです。

　舟橋聖一氏の『花の生涯』が、井伊直弼と彦根の歴史を広く伝えたことを思うと、一つの土地に息づく人々の暮らしや記憶を、物語として誰かに届けることの意味を改めて感じます。この賞が若い書き手の背中を押してきたことにも励まされました。私も、身近にある声にならない思いや、見過ごされがちな営みを、これからも小説の中にすくい取っていきたいと思います。作品を読んでくださった選考委員の皆さま、賞を支えてくださる彦根市の皆さまに、心より感謝申し上げます。

略歴

　古井　菜月（ふるい・なつき）
　1995 年生まれ。京都市在住。エンジニアとして勤務するかたわら、小説を執筆。

あらすじ

　彦根の宮殿師だった父を亡くし、故郷に戻った佐和。解体途中の仏壇から外された宮殿の屋根裏に、未来の「解く人」へ宛てた言葉を見つける。彦根城と職人たちに導かれ、佐和は父の宮殿を自分の技術で新たな形に組み直す。

第３８回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」　選考講評

選考委員　富岡　幸一郎

『解く人へ』は、仏壇づくりの職人であった父親の死をきっかけに、東京にいるその娘である主人公が、父の仕事の志を引きついでいく話であるが、彦根を舞台にして井伊直弼や佐和山城などが登場する。そのことが舟橋賞にふさわしい、というのではない。

職人の仕事。それこそが舟橋文学の精髄であり、今日の文学になくなってしまったものであるからだ。

《棺の中の父の手は、私の知るかぎり初めて、何も持っていなかった。刃物の跡だらけの指を胸の上で組ませたのは葬儀屋で、その爪のあいだに、檜の粉がまだ残っていた。拭いてやろうとして、やめた。それは父のもので、私が取っていいものではない気がした。》

いい描写である。ここには父親への深い尊敬の思いがある。しかし、それは死の直前までおのれの仕事の手を休めることがなかった父の姿を、ただ遠くから見ていた娘の思いではない。「私」の覚悟がそこに投影されているからである。

《継げと言われなかったことを、私は長いあいだ、値打ちがないと言われたのだと思っていた。父の手に、私の手は及ばない。父はそれを知っていて、だから言わなかったのだと。東京で私は、及ばない手で、売るための小さな家をつくり続けた。十四年つくり続けたら、その手は、少なくとも私のものにはなった。》

舟橋聖一は、こう語った。「一つのものを掘り返してるんです。だんだん掘り返しているうちにね、掘り当てたんだ。そうすると水が出て来るわけでしょう。（中略）僕は若い作家にこれを勧めたいな。同じ所を掘り返してごらんなさい。そうすりゃオリヂンが出る」（三島由紀夫との対談。昭和二十四年。）

創作の源泉を「掘り当て」るには、ねばり強さが肝要である。作中にあるように埋木舎の十五年であるが、三十年、五十年の歳月が必要なのだろう。今回の青年文学賞の受賞者だけではなく、これまでの受賞された方々にも、「同じ所を掘り返」す努力をしていただき、書き続けていただきたいと思う。

第２０回　舟橋聖一文学賞



朝倉（あさくら）　かすみ　さん

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

第３８回　舟橋聖一顕彰青年文学賞



優秀作品　古井（ふるい）　菜月（なつき）　さん

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

舟橋聖一顕彰青年文学賞

過去の応募件数

年　度	青年文学賞	
	回数	件数
平成元	1	100
平成2	2	40
平成3	3	159
平成4	4	113
平成5	5	70
平成6	6	93
平成7	7	155
平成8	8	178
平成9	9	133
平成10	10	152
平成11	11	146
平成12	12	111
平成13	13	111
平成14	14	73
平成15	15	100
平成16	16	92
平成17	17	111
平成18	18	68
平成19	19	58
平成20	20	68
平成21	21	96
平成22	22	66
平成23	23	75
平成24	24	75
平成25	25	61
平成26	26	61
平成27	27	58
平成28	28	65
平成29	29	39
平成30	30	53
令和元年	31	25
令和2年	32	39
令和3年	33	40
令和4年	34	33
令和5年	35	45
令和6年	36	32
令和7年	37	38
令和8年	38	57

都道府県別応募件数

都道府県	応募件数(延べ)
北海道	2
青　森	1
岩　手	
宮　城	
秋　田	
山　形	1
福　島	1
茨　城	1
栃　木	1
群　馬	
埼　玉	4
千　葉	3
東　京	17
神奈川	1
新　潟	1
富　山	
石　川	
福　井	2
山　梨	1
長　野	1
岐　阜	
静　岡	
愛　知	
三　重	2
滋　賀	(1)　4
京　都	3
大　阪	4
兵　庫	1
奈　良	
和歌山	
鳥　取	
島　根	
岡　山	
広　島	
山　口	
徳　島	1
香　川	
愛　媛	2
高　知	
福　岡	2
佐　賀	
長　崎	
熊　本	
大　分	
宮　崎	
鹿児島	1
沖　縄	
そ　の　他	
計	57

( )内　彦根市再掲
23都道府県から応募

※令和2年度から応募要件を変更し、満18歳～満30歳の年齢制限を満13歳～満30歳に引き下げています。なお、今回の応募最年少は13歳でした。

舟橋聖一文学賞規程

（趣旨）

第１条　彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる文芸作品に対し、賞を授与するものとする。

（授与）

第２条　舟橋聖一文学賞の授与は、年１回とする。

（対象）

第３条　舟橋聖一文学賞の対象となる作品は、次の各号に掲げる要件を備える作品とする。

(1)　作品の種別が小説であること。

(2)　毎年６月１日を基準日とし、概ね同日前１年に刊行された単行本であること。

（選考委員会等）

第４条　前条に規定する表彰候補作品を選考するため、舟橋聖一文学賞選考委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会は、市長が委嘱する委員で構成する。ただし、舟橋聖一顕彰青年文学賞の選考委員との兼務は妨げない。

３　前項に規定する委員は４人以内とし、その任期は４年とする。ただし、再任は妨げない。

４　特に市長が必要と認めた場合は、顧問を置くことができる。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、委員会の委員の互選により定める。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

４　委員長に事故があるときまたは委員長が欠けたときは、委員長をあらかじめ指名した委員がその職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

２　委員会の会議は、委員の半数以上が出席しなければ開くことができない。

３　会議の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

（授賞）

第７条　授賞作品は、委員会の意見に基づき、市長が決定する。

２　授賞作品は１作品とする。ただし、授賞作品がないときは、この限りでない。

３　賞は正賞および副賞とし、副賞は賞金とする。

（補足）

第８条　この規程に定めるもののほか必要な事項は、市長が定める。

付　　則

この規程は、平成１９年７月２０日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年４月　１日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年９月２３日から施行する。

第38回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣　旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第1回のＮＨＫ大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第1号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

記

1　設 置 者　彦根市

2　選考委員　佐藤　洋二郎（作家）
藤沢　周　　（作家）
増田　みず子（作家）
富岡　幸一郎（文芸評論家）

3　応募要領

(1) 応募作品　小説・随筆・戯曲・評論
※同一作品部門の応募は、1人1編に限る。

(2) 応募規定　400字詰め原稿用紙50枚以内（随筆については、10枚以内でも可）で縦書きとする。
（ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横･1行40字×25行で縦に印字し、400字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表の作品に限る。生成AIの使用は不可とする。
※郵送または持参による提出の場合、応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。

(3) 応募資格　令和8年9月1日現在、満13歳以上満30歳以下
（平成7年9月2日から平成25年9月1日までに生まれた人）
ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。

(4) 応募期間　令和8年6月1日（月）～9月1日（火）（郵送の場合は、当日消印有効）

(5) 提出先　〒522-0001　滋賀県彦根市尾末町8番1号
彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局
電話　0749-22-0649

(6) 提出方法　以下①～③のいずれかの方法による提出とする。
①インターネット（彦根市電子申請サービス）
②郵送（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）
③持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他　※応募作品は、一切返却しない。
※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。
※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。
※入賞作品を収録した受賞録は、彦根市ホームページ上で公開する。

4　賞　優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。
正　賞　　賞状および舟橋聖一色紙
副　賞　　金　15万円
※なお、佳作はなしとする。

5　発表期日　令和8年11月～12月予定（報道関係に発表する。）

6　授 賞 式　令和8年12月予定

令和８年度「舟橋聖一文学賞」「舟橋聖一顕彰青年文学賞」選考委員プロフィール

佐藤（さとう）　洋二郎（ようじろう）（作家）

昭和２４年６月　福岡県生れ 元日本大学教授

平成　７年　「夏至祭」で**第１７回野間文芸新人賞**を受賞。

平成１１年　「岬の蛍」で**第４９回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　［イギリス山］で**第５回木山捷平文学賞**を受賞。

主な著書　『夏の響き』『未完成の友情』『お母さんブタのダンス』『グッバイマイラブ』『親鸞　既往は咎めず』『Y 字橋』『夜を抱く』『日本史の嘘』『私小説を歩く』等多数。

藤沢（ふじさわ）　周（しゅう）（作家）

昭和３４年１月　新潟県生れ　元法政大学教授

昭和５９年～平成８年　書評紙「図書新聞」の編集者を務めた。

平成　５年　「ゾーンを左に曲がれ」で作家デビュー。

平成　７年　「外回り」第１１３回芥川賞候補。

平成　９年　「サイゴン・ピックアップ」第１１７回芥川賞候補。

平成１０年　「砂と光」第１１８回芥川賞候補。

平成１０年　「ブエノスアイレス午前零時」で**第１１９回芥川賞**を受賞。

「死亡遊戯」「SATORI」「ソロ」「サイゴン・ピックアップ」野間文芸新人賞候補。

主な著書　『紫の領分』『ソロ』『サイゴン・ピックアップ』『焦痕』『箱崎ジャンクション』『雪闇』『心中抄』『キルリアン』『波羅蜜』『武曲』『武蔵無常』『世阿弥最後の花』『鎌倉幽世八景』『遊ビヲセントヤ　想う、迷う、考える。』等。

増田（ますだ）　みず子（こ）（作家）

昭和２３年１１月　東京都生れ

昭和５４年　「ふたつの春」「慰霊祭まで」で芥川賞候補。

昭和６０年　「自由時間」で**第７回野間文芸新人賞**を受賞。

昭和６１年　「シングル・セル」で**第１４回泉鏡花文学賞**を受賞。

平成　３年　「夢虫（ゆめんむし）」で**第４２回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　「月夜見」で**第１２回伊藤整文学賞**を受賞。

主な著書　「麦笛」「自殺志願」「内気な夜景」「火夜」「理系的」等。

富岡（とみおか）　幸一郎（こういちろう）　（文芸評論家）

昭和３２年１１月　東京都生れ　関東学院大学教授

昭和５４年　「意識の暗室　埴谷雄高と三島由紀夫」で、**第２２回『群像』新人文学賞評論優秀作**を受賞。

平成　元年　「内村鑑三」で第２回三島由紀夫賞候補。

平成２４年４月　鎌倉文学館館長に就任。

主な著書　『戦後文学のアルケオロジー』『仮面の神学　三島由紀夫』『使徒的人間　カール・バルト』『千年残る日本語へ』『最後の思想　三島由紀夫と吉本隆明』『北の思想　一神教と日本人』『川端康成　魔界の文学』『平成椿説文学論』『入門　三島由紀夫』『古井由吉論　文学の衝撃力』『保守のコスモロジー』等。

「作家・舟橋聖一」のプロフィール

舟橋聖一は、明治３７年１２月２５日、東京市本所区横網町に生まれたが、幼少時代から病弱のため学校を欠席がちであった。７歳の時、祖母に連れられて初めて「市村座」の舞台を観劇し、８歳頃から少年雑誌・新聞小説に親しみ、９歳から１１歳にかけて二葉亭四迷の「平凡」、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」、岩野泡鳴の「耽溺」、田山花袋の「蒲団」、泉鏡花の「高野聖」等を愛読した。この時代の読書で身につけた教養が、その後の芝居と相撲に一生の情熱を注ぐ環境を作り上げたものと思われる。

大正１１年（１７歳）、水戸高校に入学するや、同人雑誌「歩行者」の同人となり、戯曲「支配する力」など数篇を発表した。また、菊地小劇場の東屋三郎の紹介で、小山内薫の門下に入った。

大正１４年（２１歳）、東京帝国大学に入学。池谷信三郎・村山知義・河原崎長十郎等と新劇団「心座」を結成。また、学内の文芸雑誌、「朱門」を阿部知二・池谷らと創刊し、初小説「信吉の幻覚」を発表した。翌年「朱門」に発表した戯曲「痼疾者」が、直ちに５月、新橋演舞場で、「心座」によって上演され、上司小剣、秋田雨雀に認められた。９月には、戯曲「白い腕」を菊地小劇場で「心座」によって上演された。１０月には、この作品を今東光推薦で〈新潮新人号〉に発表して、初めてまとまった原稿料を得た。また、「心座」では今日出海と知り合う。

昭和３年（２４歳）、新人作家１９名による「新人クラブ」結成に参加。その機関紙「文芸都市」の同人となり、同人の井伏鱒二、外村繁らと親交を結び、戯曲「襤褸」を発表。３月、東京帝国大学卒業。卒論は、「岩野泡鳴の小説及び小説論」。卒業後、明治大学予科講師となる。「文芸都市」に評論「演劇時評」を毎回連載（～昭和４年８月）。文芸家協会会員になる。

昭和４年（２５歳）、「心座」退会。劇作家から小説家へ転向する。

昭和５年（２６歳）２月、畏友・今日出海らと劇団「蝙蝠座」を４月に、小林秀雄、吉行エイスケ、井伏鱒二、今日出海らと「新興芸術派倶楽部」を結成する。６月、〈新潮〉に戯曲「バンガロウの秘密」発表。戯曲集「愛慾の一匙」を処女出版した。１０月、〈文学時代〉に「海のほくろ」を発表し、川端康成の賞賛を受ける。

昭和７年（２８歳）、「あらくれ会」の同人となり、徳田秋声門下になる。上越線車中で傾倒していた谷崎潤一郎に出会う。

昭和８年（２９歳）、「行動」創刊。中心的役割を果たす。翌年１０月、「行動」に「ダイヴィング」を発表し、行動主義の宣言をして文壇の注目を引いた。おりから、フランスの新文学に現れた知識人の政治的参加の行動性が話題になる時勢だったので、舟橋氏の能動性が時代のオピニオンリーダーの役割を果たすことになった。この時培われた精神力が、戦後日本文芸家協会の再建に、言論統制に、税金問題に、自分の信念を押し通す実行性と合理主義を兼ね備えることになった。

昭和１０年（３１歳）、「行動」が終刊、舟橋氏の行動主義への緊張がスランプに陥ることになったが、短編小説「木石」、評伝「岩野泡鳴伝」が、再び舟橋文学の面目を確保せしめた。戦争中は、時世にもろともせず、昭和１６年（３７歳）から執筆し、終戦間際に完成した「悉皆屋康吉」は代表的傑作である。

戦後は、執筆に対する制約がなくなると、「裾野」、「雪夫人絵図」、「花の素顔」、「芸者小夏」など愛欲小説が次々に発表され、名実ともに舟橋文学が確立された。

昭和２６年（４７歳）、日本古典文学の代表作「源氏物語」を平易に現代語で戯曲化した。戦後の歌舞伎に新作の流行を生み、演劇史上画期的な作品である。また、現代語による古典物を普及させるなどその意義は大きい。国文学趣向を取り入れた「ある女の遠景」は異色のもので、昭和３８年（５９歳）に「毎日芸術賞」を受賞している。歴史小説では、「白い魔魚」・「夏子もの」に次いでベストセラーとなった「花の生涯」や自伝小説「真贋の記」・「文芸的グリンプス」がある。

昭和３９年（６０歳）に、彦根市名誉市民第１号。昭和４２年（６３歳）には、「好きな女の胸飾り」で「野間文芸賞」を受賞。同年に芸術院会員となり、昭和５０年（７１歳）に文化功労者に選任されるなど、その功績は枚挙に遑がない。

昭和５１年（７２歳）死去。（１月１３日）

明治大学文学部教授。文芸家協会初代理事長。日本相撲協会横綱審議委員会委員長。運輸省交通委員。文部省国語審議会委員。中央競馬会名誉顧問。日本近代文学館創立常務理事など。